

るといえる。しかし、いつまでもこのような状況にとどまっていたはならない。早くこの調整の時代から脱却して、新しい農業の針路をうちたて、大きく前進しなければならない。80年代は調整からの脱却の時代にならなければならない。

それでは、調整からの脱却の原動力は何かということになると、なかなか難かしい問題であ

るが、新しい時代のための技術開発がその中心の一つであることは間違いないところであろう。農業が生産技術の面で大きく脱却しないかぎり、農業の新しい展開はありえないからである。

80年代の新しい年を迎えるにあたって、農業技術革新のなかで、これまで大きな役割を果たしてきた植物調節剤関連分野に、このような見地からの一大飛躍を期待したい。

年 頭 の 辞

農 薬 工 業 会 会 長 菊 池 浦 治

あけましておめでとうございます。

本年は邦歴で昭和55年、西歴で1980年を迎えたこととて、いずれも区切りの良い年で誰しも心機一転に相應しい年であります。

当業界は、国内的には農業をめぐる諸問題推移の中で53年1月に設定された水田利用再編対策の第1期3年目にあたり、南国土佐でも唄に親しまれてきたお米の二毛作もなくなり、農業使用量の動向に真剣に対応せねばならなくなっております。国際的には今この瞬間、地球上の一部では、原因は種々あるとしても飢餓に苦しんでいる人々がいるという現実には直面しているのであります。

昨年暮に農水省で試算された「昭和65年農産物の需要と生産の長期見通し」で、食生活の展望、主要品目の需給見通し、自給率が示されておりますが、10年先の65年には米の総需要量は930～1000万トン程度、このための要調整面積は80万ha、わが国水田面積の $\frac{1}{3}$ 程度になるだろうとされております。申すまでもなく転作作

物に使用される農薬が台頭してくることは明らかであります。作物の経済性とのからみ合いもあり、水稻が主軸であった時代と比べると、かなりの厳しさが予想されます。

このような時代を迎える第1年目にあたり、昨冬決定をみた本年度農薬価格は石油事情を反映する諸物価高騰の中で、メーカー側の要請が十分に聴き容れられたわけではないが、農業事情の実態から止むを得ない線で決定されております。しかしながら、公共料金を始め諸物価騰勢に加えて原資材その物の手当にも影響が出ないかとも危惧され、私ども企業は大きな試練に直面することになりましょう。

安全性対策問題は関係者あげて積極的に対処しておりますことはご承知の通りであります。これらの中で薬剤そのものの現状はどこからも指摘される点はないものと自負しておりますが、使用場面での不注意による事故が時々発生していることはまことに残念であります。

これからの問題として、企業がより秀れた農

薬の開発に意欲を燃やしていることは当然のことながら、このためには国際的視野にたって世界市場に適應する薬剤開発の体制整備の問題があります。一方、使用上の事故防止のためには既に流通機関で、それぞれの立場で運動が展開され、その成果を期待しているところであります。さらに不幸にして事故があったときの救急措置に役立つべく、昨年は関係者のご指導を得て「しおり」を作成したのでありますが、一層

の実効を期すべく対策を進めることになっております。

本年も当面する問題山積している中で、農薬の安定的供給という大切な使命を課せられている私どもでありますので、国・関係機関のご指導ご協力をお願い申し上げるとともに先輩各位の足跡を顧みながら、区切りの良い年に相應しい時代になりますことを念願して新春のご挨拶といたします。

帰化雑草・その生活型の動態

千葉県立高等学校教諭 岩瀬 徹

1. 雑草と野草

最近読んだ自然観察に関する本に、次のような記述があった。

春植物（早春季植物）であるカタクリの生活にふれたなかで、カタクリは開花後ほかの雑草におおわれて姿を消すとしている。続いてこの本は、ハルジオンとヒメジョオンにふれ、これらを野草と表現している。

自然観察を正面から取り上げた本にしても、このような混乱がみられる。雑草と野草、これを何気なく使っているが、両者は区別されるものである。カタクリの生育環境からいえば、そこをおおうものは野草とすべきであらうし、ハルジオンやヒメジョオンは当然雑草というべきであらう。

人間が生活を営む周辺に生育し、人間の用途から外れる草を一般には雑草とよんでいる。広義の雑草には、耕地雑草と人里植物が含まれる。

耕地は、作物栽培のための人為作用が定期的

かつ頻繁に加えられるところで、長年の農作業によって作物とともに培われた雑草が、ここを生活の本拠とする。これに対して、耕地以外で人為作用が不規則かつ多様に加えられるところを生活の本拠とするものを、人里植物とよぶ。路上や路傍、町なかや耕地周辺のあき地、庭園や草地などの間隙に見られるものの多くは人里植物である。

耕地へ侵入する人里植物もあり、また耕作と類似の作用を受ける人里へ進出する雑草もあって、両者の範囲を明確に区分することはむずかしい。しかし群落としての種組成を比較すれば、耕地と人里は明らかに異なっている。

雑草の大部分は1年草（越年草を含む）であるが、人里植物は1年草から多年草まで、多様な生活型をもっている。

耕作をやめた耕地には、初期のころは雑草が繁茂するが、しだいに人里植物におきかえられる。さらに年数をへて放置されると、野草の侵